

一次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

奥田克久は中学校でプラスバンドに入部した。軽い気持ちで入部したのだが、全国大会を目指すプラスバンド部の練習は厳しいものであった。そして、ついに県大会当日を迎える。

県民会館のステージのそでで藤尾が、ティンパニ（楽器名）の音を合わせていた。そと叩いたティンパニにケイソク器を近づけて音程を合わせるといふ仕事をしている時の藤尾の顔は澄んでいた。克久はこういう時の藤尾さんの顔に憧れた。それは女の子に憧れるという気持ちとはぜんぜん違う。精密機械の精巧さに憧れるのに似ているのかもしれない。最近の宗田が、**怒哀** **を** あらわにする人間的な感情を嫌悪する気持ちになっているのと、一脈、通じる感情かもしれない。

無秩序なものの秩序を与える人間が見せる慎重さは美しかった。たとえ、藤尾さんが男でも美しいだろう。男とか女とかは関係がない。

今朝の藤尾さんは違っていた。いつもの無口な藤尾さんではなかった。搬出する楽器のリストを片手にたえず喋っていた。

「あたし、大会の前の晩はいつも何かを忘れたっていう夢を見るの。あ、しまったと思うんだけど、もう遅い。欠けたままやるっていう夢を必ず見るんだ。でも、昨夜は、見なかったの。初めてよ。夢を見なかったなんて。だからね、絶対、何か忘れるものしそうな気がする、気をつけて」

楽器の搬出に残った部員に言っているのか、それとも自分に言い聞かせているのか。こんなことを言いながら歩き回っていた。もちろん、藤尾と有木は別々にリストの入念なチェックをした。全ての楽器は間違いなく県民会館に運び込まれた。

今、ステージのそでにいるのは、いつもの藤尾よりもっと深い静謐をたたえた彼女だ。

藤尾が目を見上げた。克久と目が合う。それから藤尾の視線は克久の足もとに落ちた。

「奥田君、それ」

「えっ」

克久は自分の足もとを見て「あ」と言った。なんと上履を履いているのである。持ち込む楽器のチェックは入念にしたが、誰も克久の靴まではチェックしなかった。

演奏会の時にだけ履く黒の短靴は音楽室に置き忘れてきた。

「ま、**で** **を** 出すわけじゃないから」

「何？ 何かあったの」

克久の様子を見て、リハーサル室で音出しをすませ、舞台のそでに入ってきた有木が藤尾に聞いた。藤尾の指さした克久の足もとを見て、「アハハハ」と大きな声で笑った。

「一つや二つ音はずしても、あわてるなよ。こいつなんか上履きなんだから」

有木がそう言うときクラリネットパートが全員笑った。舞台のそでには泣いている他の中学校の生徒もいた。きつと何か **A** 的な失敗をしたのだ。

「ほな、お師匠さん、行きまひよ」

このところ、関西弁で話すのがすっかり気に入った様子の町屋智弘が、川島をうながした。ユーフォニウム（楽器名）のミンミンが二人について行く。入学式から一度も洗っていない上履きでは、かなりかっこ悪いが、克久もステージに楽器を運び入れた。

「ステージに入ったら、君たちは演奏家のだから、ちよろきよろきな。きよろきよろするな。どつしり構えろ」

森勉はいつもそう言っていた。そして、最後の位置の調整は、彼自身が素早く動き回って配慮した。ここが楽団員に拍手で迎えられるマエストロ（指揮者）と違ふところだ。うちのマエストロの動きの早さとくら、どんな小動物でもかなわない。

克久もスネア（楽器名）をもう少し左へ寄せると合図された。これで定位置である。トロンボーン（楽器名）のアズモが

親指をたてて「いけるね」と合図してきた。アズモに答えたたんに、会場が見えた。観客の一人、一人の顔が見分けられる。

お母さんは正面の二階席最前列にいた。「あそこはいたか」と克久がちらりと視線をやった。隣りは今朝まだ名古屋から戻っていなかったお父さんだ。久夫と百合子が並んでいるのは意外だった。それから、克久は何かを「あれ」と感じた。そのあれが何なのかは解らないが、二人が初めて並んで座っているのを見たような気がしたのだ。例えて言えば同級生が花の木公園でデートをしているのを目撃したような感じだった。両親はいつもより **B** た。

それは一瞬の閃光だった。

曲名と学校名を紹介するアナウンスが会場に入った。指揮台わきに清り込むようにたどつた森勉が、実に素早く息を整えた。アナウンスが終わると同時に、ベンちゃんの息をきらしていた肩は、静かになった。指揮台上がった時には、数秒前まではしゃべりこく走り回っていたのがそのようだ。有木と目が合う。指揮棒が振り上げられた。高く澄んだクラリネットの音が観客をしっかりとつかまえた。ティンパニが鳴り響く。

「交響的譚詩（今回の課題曲）」は「ナナン」にこなした。様子が見えなかった。ほんの数秒のことだ。会場は **C** を打ったようだった。再び指揮棒が振り上げられた。

ティンパニが静かに打ち鳴らされ、チューバ（楽器名）などの低音グループが最初の主題を奏で始めた。克久は真つ直ぐに立っている。立っているけれども、既に身体は音楽の中に吸い取られていた。何か、大きなものに包まれる感覚だった。

そこにあるものは、目に見えるものではなかった。が、克久は全身で、そこに確かにある偉大なものに参与していた。入るとか加わるとか、そういう平たい言葉では言い表せない敬虔なものであった。感情というようになつたばかりなものでなく、人間の知恵そのものの中に、自分が存在させられていた。それが参与ということだ。

低音グループが奏でた主題に木管が加わり、音の厚みが増す。やがてティンパニがクレッシェンドで（強く）響いた。それを木管楽器たちが優しく清らかな歌で迎えた時には、克久の胸の中にあの大きな夕陽があかあかと燃えた。いつも、そこで大きな夕陽が現れる。もちろん、克久はただ音楽に酔っていたわけではない。指揮棒はたえず、音が加わるべき位置の指示を出していたし、拍は正確に数えられていた。部員だけに解る伝令が走り回っていた。それでも、あかあかとした夕陽は決して克久の目の中から消えなかった。夕陽の周囲に見慣れた団地の眺めがあり、それが斜めに射す陽光を受けて、尊いものとして輝きを帯びた。克久は音の中にそういうものを見ていた。

曲は長い尾を引いた孔雀の優雅な歩みや、青く光る首の動きを表しながら進んでいく。克久はホルン（楽器名）がタタタタン、タタタタンと、草原に吹く風の音を奏でる間に、トライアングルをかまえた。ベンちゃんの眉毛が今だと告げる。克久が打ち鳴らすトライアングルの涼やかな音を聞き逃してしまう聴衆もいることだろう。へー、それは決して欠くことができない重要なディテールだ。

一つの重要な仕事を終えた彼は、おごそかな足取りで大太鼓の前に進んで行く。まったく彼の足取りはおごそかしか言いようのないものだ。へー、その足が三ヶ月以上一度も洗ったことのない上履きを履いていたとしても、重要な儀礼に参与する司祭のおごそかさを邪魔するものではない。

「1」。「2」。「3」。今、こたという指示が指揮棒の先から飛んだその瞬間に、克久は大太鼓を一発十分に抑制して打ち込んだ。「4」。「5」。ベンちゃんの眉毛がこたぞとその打ち込むべき位置を教えた。克久の一発に続いて、マアさんがシンバルを華やかに響かせた。孔雀がその羽を震わせながら開く時の光そのものが、マアさんのシンバルの音だった。すかさず金管が高らかに孔雀の羽の輝きを繰り広げる。

金管が華やかに孔雀の大きく広げられた羽のものを表現した中へ、あの夕暮れのようなホルンが通り過ぎていき、ティンパニが最後を力強く締めくくった。次の瞬間、すべての音は完全に消え失せると同時に、威勢をほこった孔雀の姿も消えた。

四十七人の部員と一人の指揮者がいる。拍手が湧き起こるより先に、四十七人の部員は、ただの中学生に戻る。克久は中学校を卒業するまでの間に何度となくこの不思議な瞬間を経験することになるが、最初に経験したのはこの時だった。

夢から覚めるといふようなあいまいなものではなかった。この世界には敬虔に参与すべき何かがあることが明快に身

体で解る場所がそこにあった。そこから大事なものは隠されてしまっている場所へ戻ったということだ。大事なものは隠されているが、克久はその痕跡をしつかり握っていた。だから、ホールのロビーで久夫から「上手だな」と言われた時、妙にしらけた気持ちになった。久しぶりに見る父の顔だが、克久はあまりうれしそうな顔はできなかった。

「俺、ちよつと、二発目の大太鼓の入りが遅れたから。まずかった」

「いや、うまいよ。上手だよ」

久夫に言われるほど、克久はしられてしまう。そのしらけたのは地区大会で百合子に「小学生とはぜんぜん違う」と言われた時の、それどころじゃないという感じとは違った。久夫に「うまい」と言われるほど、克久の満足した気持ちにこたえていくような感じだった。

(中沢けい「楽隊のうさぎ」より)

注1「静謐」：静かで落ち着いたこと。

注2「敬虔」：うまいつつしむ気持ちの深さ。

注3「ディテール」：細かなところ。

注4「可憐」：優美でかわいく見える。

問1 線a「ケイソク」、線c「ブナン」のカタカナを漢字に直さない。

問2 線b「入念」、線d「奏(で)」の漢字の読み方をひらがなで答えなさい。

問3 本文中から次の意味の外来語をそれぞれぬき出しなさい。

① 案内放送 ② 予行演習

問4 へⅠ・へⅡに入るのにもつともふさわしい言葉を次のア～オからそれぞれ選び、記号で答えなさい。

ア たえ イ だら ウ つまり エ しかし オ そのうえ

問5 線1「音程を合わせる」とあるが、別の言葉で言い換えた表現を、本文中から十字以上十五字以内でぬき出しなさい。

問6 線2「☐ 怒哀 ☐ 」とあるが、空らんに入るのにもつともふさわしい漢字一字をそれぞれ答えて、四字熟語を完成させなさい。

問7 線3「藤尾さんが男でも美しいだろう」とあるが、ここでの克久の気持ちを説明した次のア～オから最もふさわしいものを選び、記号で答えなさい。

ア 藤尾の女性らしい点を感じることができない。
イ 藤尾の見た目の大人っぽさに関心を寄せている。
ウ 藤尾の洗練された行動に対して感動を覚えている。
エ 藤尾の男らしい動作に親しみやすさを感じている。
オ 藤尾の素直な性格をうらやましく思っている。

問8 線4「☐ で ☐ を出す」とあるが、空らんに入るのにもつともふさわしい漢字一字を、それぞれ本文中からぬき出しなさい。

問9 ☐ A に入るのにもつともふさわしい言葉を次のア～オから選び、記号で答えなさい。

ア 段階 イ 一時 ウ 感情 エ 決定 オ 具体

問10 線5「君たち」とあるが、誰のことを指しているのか。線5より後の部分から七字でぬき出しなさい。

問11 ☐ B に入るのにもつともふさわしい言葉を次のア～オから選び、記号で答えなさい。

ア 白々しかつ イ 重々しかつ ウ 福々しかつ エ 若々しかつ オ 騒々しかつ

問12 ☐ C に入るのにもつともふさわしい漢字一字を答えなさい。

問13 線6「偉大なものに参与していた」とあるが、これとは同じ内容を示している表現を、本文中から二十五字以上三十字以内(句読点も字数を含む)でぬき出し、最初の五字を答えなさい。

問14 線7「彼」とあるが、誰のことか。本文中から五字以内でぬき出しなさい。

問15 「1」「5」に入るのにもつともふさわしい文を次のア～オからそれぞれ選び、記号で答えなさい。

ア 小さなミスは、それぞれにすり傷、切り傷となつてしみ込んでいたが、痛みを訴える暇はなかった。
イ その指示は指揮棒からはこない。
ウ もう一発、重要な部分がある。
エ 少しも間違いないとは言えない。
オ 曲はクライマックスをめざし、正確に進行していた。

問16 線8「久夫から「上手だな」と言われた時、妙にしらけた気持ちになった」とあるが、そのときの「克久」の気持ちはどうなのか。その説明としてもつともふさわしいものを次のア～オから選び、記号で答えなさい。

ア 演奏を通じてみんなの団結心に気づき気持ちが高ぶっていたが、第三者である父親から軽々しくほめられたことで喜びが半減してしまっている。
イ 自分自身の出来には納得し喜んでいただけだが、他のみんなの出来が悪かったために父親から自分だけがほめられている気がして心から喜ぶことができない。
ウ 恩師である森先生からほめられたと思っていたのに、父親からしかほめられなかったことで喜びが半減してしまいか複雑な気持ちになっている。
エ 父親が演奏会を見に来ることを事前に知らされていなかったで、急に来た父親に対して素直に喜ぶどころか嫌悪感を抱いてしまっている。
オ 音楽の偉大な世界に初めて気づかされた直後に、音楽のことをよく知らない父親に無責任にほめられたことでその喜びが傷つけられてしまっている。

二次の文章は、リンゴ農家を営む筆者が、経験をもとに自分の考えを述べたものです。冒頭は一面に雑草が生えている筆者自身の農地を、見学者に見せた場面から始まります。よく読んで、後の問いに答えなさい。なお、「」の中は、その言葉の説明である。設問の都合で、段落の最後に 1 6 の数字が書かれている所がある。

草が私の背丈ほど伸びています。雑草は大きな役目があつて伸びています。この後こは田んぼになります。こんなところがという声が聞こえます。

実は畑に与え過ぎた堆肥の成分、栄養を雑草に吸い取つてもらつてゐるのです。草が大きな働きをしてくれ

雑草を土に引き込んだら「土と雑草を混ぜ合わせて耕す」と雑草の中のもの「また元に戻る」ので、持ち去ります。土の中のものを雑草が吸い込んでいます。土の匂いをかいで山の土の匂いに近くなるまで、田んぼ作りはすると言つています。人が土を作るのではなく草が土を作つてくれるのです。

さまざまな雑草が生えていることは土にすくういのです。人間でも毎日同じおかずだと飽きてくるでしょう。土の中ではいろんな雑草や植物がホルモン「有用な働きをする化学物質」を出しています。大豆の根には大豆の根の匂いにつられ、成分を分解するバクテリア「細菌」が集まります。草にはその草特有のバクテリアが集まります。多種多様のバクテリアが集まると病気が出てきません。 1

白菜を植えると根にこぶがでることがあります。キャベツもそうです。これは偏つた土を作つてゐるからです。線虫「害虫」や土壌の微生物が集まつて起こす病気です。いろんな雑草が生えていてこそ、土としてノゾましい姿になります。

山へ行つてみてください。杉の下に生える草は決まつています。杉林の下を畑にする作物の出来はすく悪いです。一方、竹林や落葉の雑草の雑木林の下ではたいのものができます。

小麦の根は八十センチ張りします。ライ麦は一メートル六十センチ入つて深く耕してくれま

雑草を丁寧に取つてみると、土が固まつてしまひます。土をつくるために草をほうほうにしてください。草ほうほうのリンゴ畑は猛暑の中でも二十四度以下で、土が湿気を保つています。雑草の力はすこい

は草を生やしましょう。 マメ科の根粒菌「植物の根に付く微生物」を見ると分かります。大豆を植えて根粒菌がゼロということ

養分があるということです。三十粒以上ついたらまた来年もやつてみてください。目途としては十粒以下ならもうやる必要はありません。根粒菌は土の状態をよく表してくれる「土のバロメーター」です。 3

豆を初めて植えると根粒菌が一杯つきますが、二、三年するとだんだん少なくなりま

で、お休みしているだけではないと思ひます。土の中は絶対値「栄養素の基準」が一、二を越すことも、一を下ることもありま

せん。 私の栽培は豆の根につく根粒菌の働きを利用します。大氣中に無尽蔵にある養分をこの粒々の中にある菌がつかまえてくれるのです。

自然というのは人が考える以上にバランスがとれてゐます。だから山は何千年も続いています。百年も生きているよ

うな木は人が手を加えていないから生きています。 4

ある自然農法の団体の農場を見学したところ、大きな間違いをしようと思つたことがあります。ナスを植えているのを見て、これは何だと思ひました。ナスの原産地は東南アジアで土が温かくないとダメです。彼らはまるで A のことをやつていました。

最初の指導者はワラや枯れ草を敷けと教えたのに、彼らは枯れ草の代わりに去年のイネワラを非常に厚く敷いてしま

敷いては悪影響しかもたらしません。 5

自然の姿を見ましよう。枯れ枝はそんなに厚く敷かれていますか？ 農業では大根を植えたら全部大根、連作を避けるため、今度はホウレンソウとか別の作物を全部植える。こんなことは自然界にはありえないのです。

山の土というのは窒素、リン酸、カリ「作物に必要な養分」がほとんどありません。それなのにあれば草木が元気に育ちます。

というところは B が実は違つてゐるのではないか、という疑問が生じます。要は根が通つて行きやすい、酸素が入つてゐる土をつくつてやればよいのではないかと思ふのです。

孟宗竹の落葉のころは一番いい土になります。根粒は最低で十一年生ると言われているので、根粒菌を利用してあげるとあとは何もいりません。人間が悪さをしなければ、土壌菌、バクテリアが植物を育てていきます。

自然の山には耕起する人がいません。山に行つてミミズを探るのは容易ではありません。でも人間の畑の下にはミミズがウヨウヨいます。実はミミズは未分解の有機物「動物や昆虫の死がい」を分解するためにいるのです。山でミミズを見かけないことは、山にはそれほど C ということです。 6

「土は上からつくる」と言ひます。人間は生産を追求した結果、土壌のバランスを崩し、害虫を呼んでゐるのかもしれない。悪いことをした自分の罪を棚にあげてゐます。人間は土の生態系を守るべきなのに、安易に機械によつて土の構造を変えようとしてゐます。耕し方によつて土の生態系はすべて変わります。これは自然に反する行為ではないでしょうか。

畑にある肥料、農業たつぷりのタンポポは丈が短くて、アブラムシで一杯です。なぜアブラムシがいるのでしょうか。私の畑のタンポポは茎が五十センチになります。花もつかないです。虫は探しても見あたりません。何も使わなくても虫がいま

せん。道路に生えているタンポポは、肥料、農業たつぷりのタンポポより丈が大きいです。質問します。窒素肥料を作物に十キロ施しました。ではその作物は窒素を何キロくらい使つてしまふのか？

十キロと思ふ人はだれもいないでしょう。五キロと思ふ人もいません。想像がつかないと思ひますが、十キロの半分はガス化して、大氣汚染の原因の一つになつてゐます。

残り五キロの半分は土壌が取りま

す。土の中には未分解有機物がいっぱいあります。植物の根の残さ「土の中に残った根の一部分、カス」などです。これらが発酵するには窒素が必要です。あと二、五キロ残つてゐます。それを作物と雑草が奪ひ合ひま

す。雑草が少し優勢で、作物は約一キロしか吸収していません。 田んぼや畑に撒く肥料は、一割ほどしか使われていないのです。だから最初から無肥料でもできるわけです。だから私は「D から E を生む」と言つてゐるのです。

ちよつとした工夫をすれば一キロぐらひはマメ科の作物ができます。また F 効な窒素というのは水に溶けやすく、雨が降ると雨と一緒に下りてきます。

窒素、リン酸、カリの三大要素がないと作物は育たない、と教科書には書かれています。果たしてそうでしょうか。リン酸、カリは何の役に立っているのですか、本当に必要なのですか。まだ分からないことがたくさんあります。窒素が必要なのは明白なのですが。

養分は作物が利用できる G 効な状態のままで、畑にあると推測されます。それを生かせるか生かせないかがカギになります。土壌微生物群と作物、雑草、大氣、土との関係が大切

です。植物は欲しい時に（必要な時だけ）必要な量だけ養分を吸収します。過剰な量は必要ありません。結局、肥料は五割もガス化するから、肥料をやつても作物はすくなくいい効果を見せしてくれま

せん。すると、人間は追肥という形でどんどんつぎ込みます。化学肥料だと必然的に微生物がいなくなるので、ますます養分を貯蓄できなくなりま

す。バクテリアの体内窒素量を弘前大学農学生命科学部の杉山修一教授が調べたところ、隣の肥料を施している畑と私の何も施していない畑では、私の畑はバクテリアの体内窒素量が倍くらい多いという結果が出ました。またリンゴの葉の表面や土壌には、ほかの畑の何倍もの微生物がいるそうです。白神山地の原生林と私の畑の状況がよく似ているとも言われ

ました。 結局このバクテリアの体内窒素があるため、常に必要な時期に窒素が供給されてゐるのではと推察されます。バクテリアはどこかのタイミングで窒素を放出し、作物はそれをうまく吸えるように根を張り巡らし、さつと吸収し体内に取

り入れているのです。

数多くの種類のバクテリアが存在するので、作物はこの使われ方によってうまく利用できます。ところが、この微生物を殺してしまうと、さらに肥料を入れなければならないようになります。私たちはこの矛盾にそろそろ気づかなければなりません。

(木村秋則「リンゴが教えてくれた」より)

問1 線a「ノゾ(ましいい)」のカタカナを漢字に直しなさい。

問2 線b「雑木林」・c「安易」の漢字の読み方をひらがなで答えなさい。

問3 次の文はある段落の最後の文である。どこに入るのが適当か、もつともふさわしいところを選び、記号で答えなさい。

肥料をやった何年かで枯れるかもしれません。

問4 線1「土の中のもの」とは何か、本文中から十五字でぬき出し、最初と最後の三字を答えなさい(記号等も一字とする)。

問5 線2「杉林の下を畑にする」と作物の出来はすこく悪いです」とあるがなぜか。それを説明した次の文の空らんに入るのもつともふさわしい四字の言葉を本文中からぬき出しなさい。

杉林の下は

問6 線3「雑草の力はすごいです」とあるが、ここで言う「雑草の力」のうち誤っているものを次のア・イから一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 周囲の湿度を保つ イ 作物が病気になるにくい ウ 根粒菌がたくさん付く
エ 土が固くならない オ バクテリアが活動する

問7 線4「大豆を植えて」ということです」とあるが、土の中はどのような状態になっていると考えられるか。その説明としてもつともふさわしいものを次のア・イから選び、記号で答えなさい。

- ア よく消毒されて、清潔な無菌状態になっている。
イ 周囲の畑と比べて、同じ位の栄養状態になっている。
ウ 植物が使い切れない程の豊かな栄養状態になっている。
エ 植物を育てるには、少し足りない位の栄養状態になっている。
オ 養分が、何も手を加えなくても良い位、適正な栄養状態になっている。

問8 「いくらかもある」という意味を持つ熟語を、3の記号が付いている段落から5の記号が付いている段落までの間からぬき出しなさい。

問9 A に入るのもつともふさわしい漢字一字の言葉を答えなさい。

問10 B に入るのもつともふさわしいものを次のア・イから選び、記号で答えなさい。

- ア 科学の常識 イ 自分の考え方 ウ 自然のあるべき姿
エ 東南アジアでの農法 オ 最初の指導者の育て方

問11 線5「悪さ」とあるが、具体的にどのようなことをすることか、もつともふさわしいものを次のアから選び、記号で答えなさい。

- ア 肥料を与えないで作物を育てること。
イ 根粒菌を利用して栽培すること。
ウ 多くの肥料を畑に撒くこと。
エ 自然にある水を利用して作物の成長を促すこと。
オ 作物が育ちにくい場所に苗を植えること。

問12 C にはどのような表現が入るのがふさわしいか。その表現を、4より前の本文中の言葉を使い十字以上十五字以内で考えて答えなさい。

問13 線6「棚にあげています」とあるが、本文中で使われている意味として、もつともふさわしいものを次のア・イから選び、記号で答えなさい。

- ア とても大切にすること イ わざと触れないこと ウ 物を持ち上げること
エ 例を上げること オ 要らない物を収納すること

問14 線7「しか」と同じ意味の使われ方をしている言葉(傍線部)を含むものとして、もつともふさわしいものを次のア・イから選び、記号で答えなさい。

- ア あなたこそ正しい。 イ 動物さえ生きようとしている。 ウ 植物だって生きている。
エ 自分だけ病気になる。 オ 歩きながら食べてはいけない。

問15 D G には「有」か「無」のどちらかの言葉が入る。空らんそれぞれに入る言葉として、もつともふさわしいものを答えなさい。ただし、「有」の場合「ア」、「無」の場合「イ」と記号で答えること。

問16 線8「矛盾」とあるが、どのようなことが矛盾なのか。その説明としてもつともふさわしいものを次のア・イから選び、記号で答えなさい。

- ア 山林や畑などを出来るだけ増やせずに、より多くの作物を得ようと努力し続けること。
イ 人間が追肥という形で自然を破壊しておきながら、一方で自然保護の活動すること。
ウ 窒素、リン酸、カリをバランスよく含んだ化学肥料があるにもかかわらず、使おうとしないこと。
エ 土の中にいるバクテリアの体内窒素を生かす工夫をして、非常に栄養のある作物を作ろうとすること。
オ 微生物によって土の栄養状態がよく保たれているのに、人間が化学肥料を加えその状態を悪くしていること。

(以下 余白)

国語

一 問 1 a

問 2 b

d

で

問 3 ①

②

問 4 I

II

問 5

問 6 怒哀

問 7

問 8 で

を出す

問 9

問 10

問 11

問 12

問 13

問 14

問 15 1

2

3

4

5

問 16

二 問 1 ましい

問 2 b

c

問 3

問 4 最初

最後

問 5

問 6

問 7

問 8

問 9

問 10

問 11

問 12

問 13

問 14

問 15 D

E

F

G

問 16

【注意】 ① 受験番号は、算用数字で横書きにすること。
② あみかけの部分には、何も書かないこと。

氏 名

左のらんに何も書かないこと

□ □ □ □ □ □ □ □

受 験 番 号

□ □ □ □ □